

No. (42) 平成 30 年度 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業成果報告書

事業名称	長泉町の地域の子ども・子育て世代を支援する地域の美術館事業		
実行委員会	長泉町の地域の子ども・子育て世代を支援する地域の美術館事業実行委員会		
中核館	ベルナール・ビュフェ美術館		
	住所	〒411-0931 静岡県長泉町東野クレマチスの丘 515-57	
	TEL	055-986-1300	FAX 055-987-5511
	ホームページ	www.clematis-no-oka.co.jp/buffet-museum/	
構成団体	長泉町教育委員会、長泉町校長会、長泉町園長会、長泉町立幼稚園 PTA 連絡協議会、長泉町 PTA 連絡協議会、長泉町子ども会育成連合会、ヴァンジ彫刻庭園美術館		
事業開始時点の課題分析	<p>人口増加、出生率が高い地域である長泉町に位置するベルナール・ビュフェ美術館は、地域の子どもたちを対象に、絵画展の開催やこども美術館の設置などの活動を長年行ってきたが、地域の教育機関、関係者との連携、対話は十分ではなかった。そこで、平成 27 年度より「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」として、地域の教育関係者と連携しつつ、地域の子どもや子育て世代の美術館利用を促進する工夫をしてきた。その結果、子どもや子育て世代を対象とした事業を行っている美術館というイメージが定着するなど一定の成果がみられるようになったが、リピーターの占める割合が多いなど、積極的に利用する層はまだ限られているという課題がある。これまでの事業での傾向を見ると、子育て世代には美術館になじみの薄い人が多く、美術作品を鑑賞する、あるいは自分で作品をつくるという活動だけではなく、例えば身の回りの自然や色に注目するなど、日常では意識していなかった感じ方や考え方を得るといった活動が求められているのではないかと考えられる。子どもたち自身が自分の感覚に気がつき、好奇心を喚起される機会をつくることは、自分とは違う考えや知らない世界が表現された美術作品という他者を受け入れるための土壌を育てていくことにつながるだろう。作品鑑賞、制作だけではない、子どもたちの感覚、好奇心を刺激する活動とはどのようなものかを考えていく必要がある。</p>		
事業目的	<p>本事業では、ベルナール・ビュフェ美術館を中心とするクレマチスの丘の文化施設が、地域の子ども・子育て世代を支援する施設として認識され、機能するために、特に美術館になじみが薄く、来館しづらいと感じている子育て世代にむけての活動、情報発信に重きを置く。子ども・子育て世代と美術館との接点をつくる活動を行い、その効果を検証することにより、地域の子育てに美術館が寄与する方向を探っていく。</p> <p>上記の活動をふまえ、美術館と子ども・子育て世代との関わりについて、誰もが共感しやすい言葉で教育活動のミッションステートメントをつくり、美術館などの文化施設が、地域の子育てと関連する場所であることを明確に示すことも目的とする。その際、ベルナール・ビュフェ美術館を中心とするクレマチスの丘が 4 つの分野の文化施設の複合体であること、庭園を含め、自然とのかかわりも深い立地、環境であることなどの特徴も考慮する。</p>		
事業概要	<p>本事業は次の 2 つの項目から構成される。1. 子どもと子育て世代と美術館をつなぐ教育活動の実施とその効果検証、2. 子どもと子育て世代と美術館をつなぐ教育活動のミッション作成検討、である。1 では、特に美術館になじみの薄い子ども・子育て世代を対象に、従来の作品鑑賞や制作が中心の教育活動以外に、より広い視点からアートへの関心を高める活動を実施し(1)、その効果を検証する(2)。効果測定の尺度、方法そのものについても、地域の関係者や専門家を交えて考察していく。2 では、美術館での教育活動の意義を地域の人々と共有するために言語化する。その際、先行事例の視察・ヒアリング、地域の関係</p>		

	<p>各所との対話を行いながら、議論、合意形成していく。2つの項目は相互に関連しあいながら、地域の子育てを支援する美術館の在り方について、特に、美術館になじみの薄い子ども・子育て世代を念頭に置いて、実践を通じて検討、構築するものである</p>
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <p>■ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携</p> <p>□イ ユニークベニューの促進</p> <p>□ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館</p> <p>□エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信</p> <p>(2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p> <p>□ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成</p> <p>□イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発</p> <p>□ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施</p> <p>□エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業</p> <p>(3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <p>■ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動</p> <p>□イ 文化財の新たな保存管理・活用手法の開発</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>作品の鑑賞や制作の土台となる「感覚を刺激し、ひらく」ためのワークショップやツール開発など、新しい試みを行った。参加者の反応も肯定的で、身近なものを見直したり、新たな視点を得たという感想も多かった。これまでの制作系のワークショップよりも、「家でもやってみたい」「他にも試してみようと思う」という感想も多く、作品の鑑賞の素地である感性を刺激するという目的に、こうした事業が有効であるという手ごたえを得ることができた。</p> <p>こうした事業が、美術館を苦手としている人々の来館に結びついたかどうか、その因果関係を明確にすることは難しいが、どのワークショップでも、それを機にはじめて美術館に来たという人の参加は一定数あった(約10パーセント)。初めての人は、図書館など他の施設でチラシを見ての参加が多かった。</p> <p>新しいタイプのワークショップを行うことで、既存のワークショップの目的や意義についても、改めて考えることとなった。また、ファミリーラーニングの専門家も交えた調査・検討によって、当館のプログラムの特徴や強みについて、キーワードを抽出した。これらのキーワードについては、ワークショップを企画・実施する際に、企画側が自己チェックを行うための指標として活用していくこととなった。この指標は、館のスタッフ内での価値の共有に加えて、地域の人々に意義を説明していく上でも役立つと考える。実際、キーワードを用いて事業の意義を説明すると、地域の関係者からも、助言や意見がしやすいとのことであった。先行事例調査からは、教育普及のミッションを文章として表明するのとあわせて、写真などのビジュアルを用いて、効果的に発信していく重要性も実感した。しかし、ビジュアルとイメージだけが一人歩きしてしまう危惧もあるため、今回抽出したキーワードは、写真などのビジュアルをSNSなどで発信するときにも、伝えるべきイメージの指標として、美術館の活動に対する地域の理解を醸成していく助けとする。</p>

【事業実績】